# 進路意識の形成に役立った総合学科

内山雄平

## 一、はじめに

最初に、将来への進路に対する目的意識が形成され、自覚したとき、その実現に向けて本気で学習に取り組み、充実した高校生活を送ったF君を紹介したい。彼は一年次在学中病気で長期入院をした際に、担当医の影響もあって、医療への興味・関心を強く持った。将来看護師になりたいと思い、退院して復学後、在学中は猛烈に勉強し、骨髄バンクなどのボランティア活動にも率先して参加するなど充実した高校生活を送った。卒業後の進路は、彼の医療への強い興味・関心のある研究テーマ「園芸セラピー」の活動（学校農業クラブ新潟県大会プロジュクト発表で最優秀受賞）を生かし、AO入試によって短大へ進学。その後も熱心に勉学に励んでいると聞く。

このような生徒はどのような進路指導によって育てられうるのか、これまでの専門学科生徒の進路指導の総括をふまえつつ、新しく改組された総合学科における「生徒の進路意識を高める指導のあり方」について、総合学科の要といわれる一年次の原則履修教科目「産業社会と人間」の実践とこれを繋ぐ二年次の「インターンシップ」の取り組みにふれながら述べてみたい（〇一年度、これまでの農業・林業・農業経済・商業・情報経理の各部門学科が総合学科に改組）。

## 二、生徒の目的意識を形成する指導のあり方

### (1) これまでの進路指導の総括と課題

これまで進路に関わる指導は、一・二年次のＬＨＲ時や特別時間を設け、生徒の進路意識の形成を図り、自己の進路決定に導くために、民間人や進路ガイダンスの業者を招くなどして、働くことや進学することの意義、資格と職種との関連、社会が求めている資質など各種のガイダンスを実施してきた。無論、保護者には本校の進路状況や進学・就職に関わる情勢報告、親として子どもの進路への関わり方についての講演、学校として生徒の進路保障をどのように取り組んでいるかなどを各学年毎に説明会を開催した。生徒たちが進学か就職かを決定する時期は、三年次になってからであり、本格的には六月末から始まる三者会議（生徒・保護者・担任）以降である。進路選択の決定時期は非常に遅くなる。

進路指導をめぐる論議で一番の問題となったのは、進路選択を自分でなかなか決められないことや、就職する生徒は、希望する企業の志望動機をなかなか書けない点である。何故、その企業を希望するのか、その職種にどのような思いを抱いて働くのかが分からないのである。進学する生徒の中にも何故その学校を希望し、将来どんな勉強をしたいのかを書けずに、大学等のパンフレットを見ながら記入する例が多い。

こうした生徒の職業意識や進路意識は、一部事務所からは「高校三カ年で進路選択を自らできない生徒は採用しない」という厳しい声が聞かれたり、上級学校に進学しても専攻が自分の適性にあっているのかどうか悩み（ミスマッチ）、進路変更をする者が全国の短大・四大で年間四万人にものぼることにも現われている。

これら自らの職業や労働に対する自覚や意識の希薄さは、その理由の一つに進路に関わる実体験が不足しているのではないかと考えた。具体的な体験によって、自らの適性・興味についての認識が深まり、進路選択も確かなものとなり、実体験に基づく自己アピールは、履歴書や面接の志望動機に強い説得力を持つ。

生徒の進路に関わる様々な体験の機会を設けることは、総合学科において設定しやすく、これからの進路指導にとってきわめて重要な取り組みととらえた。た

だし、上から押し付けられた体験では自らの進路意識を高め、自己実現へと発展しにくく、体験する機会を企画する際には、「生徒自ら行動する」という観点で取り組ませることが肝要と考えた。

### (2) 総合学科における教科「産業社会と人間」の取り組み

1. 教科「産業社会と人間」の位置づけ

総合学科は、個性尊重・進路指導重視を特色とする新しい高等学校の学科体制であり、将来の進路選択をふまえて、しっかりとした目的意識をもった主体的な学習に取り組むための指導を充実させることが重要だといわれている（総合学科における適応指導「日本進路指導協会編・進路指導」九七年五月号）。この点で、総合学科に設置された新しい科目が、原則履修科目「産業社会と人間」である。

学習指導要領ではその目標として、『「職業生活」、「わが国の産業の発展と社会の変化」「進路と自己実現」について学習し、様々な体験や学習や討論を通じて、自己の生き方あり方について認識を深め、将来の職業選択や職業生活に必要な能力・態度を育成すること』を掲げている。

この科目を一言で言えば、「将来の進路について自らが選択できるよう道筋を示すガイダンス」といわれる。本校では「産業社会と人間」の指導内容を次の四つの項目に分け、①自己を見つめる　②職業・産業の理解　③系列・科目の履修計画　④ライフプランの作成　としている。この進路学習の取り組みは、自らの手で進めることを重視しつつ展開した。

2. 「職業人へのインタビュー」の試み

初年度（〇一年度）一番力を注いだのは、「職業人へのインタビュー」である。これは、職業・産業の理解を深め、将来の進路選択や自己の進路実現に必要な職業観・労働観を身につけるため、希望する管内の企業、公官庁・団体等計一四六社を訪ね、「実際、仕事をしていく上で一番大切なこと、一番苦労したこと、この仕事を続けて良かったこと」などについて尋ねたものである。職業人へのインタビューの目的を次のように設定した。

① 職業理解を促す ―

岩船・村上管内における職業・職種について、タウンページ等を活用して訪問先を選ぶ。

② 職業観・労働観を育てる―
「苦労したこと」「その職業にとって必要なこと」「働きがい」などの質問事項をとおして理解する。

③ 自己理解の手助けとする―
その仕事の見聞をとおして、自分の適性を知る機会とする。

④ 社会性を身に付ける―
身だしなみ・電話のかけ方・公文書・礼状の書き方など社会人としてのマナーを養う。

3．取り組みの準備とインタビューの実施について

あらかじめ、ハローワーク村上・村上商工会議所・市役所へ出向いて「職業人へのインタビュー」の取り組みに対する理解と協力を要請する。さらに生徒は、自分が希望する各事業所へ直接電話でアポイントメントをとり、公文書を作成する。

生徒たちは、受け入れ事業所の都合に合わせて、「産社」授業時間帯・放課後・土日に出向き、あらかじめ用意してきた質問事項について三〇～四〇分間尋ねた。その結果を報告書にまとめ、クラス内で一人一人がそれぞれ発表し、さらに、各クラスの代表者による学年全体の報告集会を開いた。この取り組みは、各自のまとめる力、発表する力、話を聞く力を養い、互いに学んできた内容を共有し合うことをねらいとした。

4．この取り組みに対する評価について

① 生徒の感想・意見

学年発表で生徒が共通して取り上げている内容をみると、

ア．その職業に対するそれまでの固定していたイメージが崩れ、より深くその仕事を理解できた。
例えば、薬剤師…「医者に頼まれた薬をつくること」から「患者の立場と同じ気持ちになれること」「教師という職業は実に多くの仕事があり、表からは見えない影の努力が大変で重要である」

イ．その職業に従事する上で大切にしなければならないことを学ぶ。
例えば、教師・保育士・店員…相手の気持ちを思いやることなど

ウ．話を聞いて、自分がこの職業に向いているかどうかある程度わかった。などである。

また、生徒全体のアンケートでは、この取り組みが「大変役立った」「まあまあだった」と合わせると、

九〇%を超え、多くの生徒たちが職業に対する認識を深めることができ、進路意識の啓発に役立つことができたと思う。

② 受け入れ事業所の感想・意見

インタビューの受け入れ先に、この取り組みに対する評価をアンケートで探ると（一〇/一四六）、六九・二%の回答）。

「生徒の職業意識を高める上で役立つか」の問いには、進路への自覚が高まるとして、特に「生徒の目的意識を明確にするとともに、社会人として生きていく上で高校生に自覚を促し、生活基本的な面（礼儀・対応）などの勉強にもなる」、「自分の将来を決めるにあたり、漠然としていても興味関心ある職業について情報を得ることにより自分の考え方を明確にする材料になる」などと評価された。

また、「職業意識を高めるための手だてについて」という問いに、多くの方々から、「インターンシップの実施を望む」声があり、とりわけ、進路指導への要望として、「多くの桜ヶ丘の卒業生が地元の重要な職場で働いている。これからこういった人たちと連絡を取りながら職業意識を高めて欲しい」、「職業に対する幅広い知識と働くことの意義、社会性の習得等を考慮した取り組みを」、「自分の希望する職業につくために、今自分はどのような努力や勉強をすればよいか、一人一人が自覚する指導を」など、今後の進路指導に対する貴重な回答をいただいた。

加えて、「何事にも目的意識をもち、立ち向かう若者は未来への希望になる。このような生徒の育成を学校・地域社会が一体となってやるべきだ」との要望があり、学校と地域社会とが連携し、生徒が目的をもって地域に入り、学ぶ教育は、今後の高校教育のあり方をめぐって重要な示唆を与えてくれた。

### (3) 「職業人へのインタビュー」の体験を二年次の「インターンシップ」につなげる

一年次の「産業社会と人間」を生かして、二年次の八月の夏休み三日間、希望者による「インターンシップ」を実施した。

このねらいは、「産業社会と人間」で学んだ「職業人へのインタビュー」や「ライフプラン」にもとづいて、進路に関わる自己の深めたい課題（こんな職場で、こんなことを学びたい、知りたい）を明らかにし、就

業体験を行うことによって、その課題の解決や、将来の進路を見定め、その実現に向けて自らを高める力を身に付けることとした。

1．取り組みの概要

① インターンシップの受け入れ先

本人の希望によるインターンシップと位置づけたため、参加希望者は、わずか二〇人と少人数であったことから、依頼する事業所は容易に確保できた（一〇カ所）。

受け入れ先は、ほとんど岩船・村上地区内の企業（旅行業者）・商店（喫茶兼販売）・保育園（保育）・病院（看護・栄養）・農家（畜産・野菜各農家でのファームスティ）である。ファームスティは、毎年、県農業改良普及センターと農業高校とで共催し、実施している企画に参加した。

② 受け入れ事業所との事前の打ち合わせ

インターンシップを実施するにあたって、受け入れる事業所に出向き、取り組みの趣旨に対する理解と協力を要請し、実際の就業体験および指導内容についての打ち合わせを行った。生徒は、就業する内容によって、受け入れ先での損傷事故や自分自身のけが等も考え、産業教育振興中央会の保険に加入する。

③ 生徒に対する事前・期間中・事後の指導

夏休み前に、それぞれが受け入れ先で「何を学んでくるのか」を明確にし、服装・身だしなみ・作業中の安全確保・勤務などの留意事項の説明や体験の決意を固めるための事前指導を行う。就業体験第一日目には、担当教諭が受け入れ事業所に赴き、指導担当者と生徒に立ち会う。期間中の日誌には、本日の目標・実施内容・成果などを記録、さらに指導担当者の所見を添えてもらう。三日間の短い体験ではあるが巡回指導を実施する。

事後の指導は、就業体験の報告書の作成、自己評価を行い、九月に入って改良普及センターやハローワークの職員を招き参加者による報告集会を実施した。

(4) インターンシップに対する生徒の感想

インターンシップの報告集会に参加したハローワークの職員から、「このインターンシップに参加する前の自分と体験後の自分とでは何がどう変わったかを発表して欲しい」との提起があり、これに対する生徒の発言から引用すると、

＊すごく看護師になりたいというわけでないのに、将来は世話をする仕事に就きたいと思っていたので希望しました。体験を通して、働くことの厳しさと人を助けるという重みのある仕事を感じることができました。今まで考えたことがなかったのに、今はすごく看護師になりたいと思うようになりました。

＊体験の前の私なら、「テストだから勉強するんだ」という気持ちがどこかにあったかもしれませんが、今は「テストではなく将来のために勉強しよう」と言う気持ちです。

＊将来保育士になりたいと思っていましたが、体験してみて保育の大変さ、難しさを知りました。でもやっぱり子どもはかわいいし、笑顔で毎日過ごせるなんてこんな楽しいことはないと感じました。

＊私は、「仕事（現実）の厳しさ」を知りたいと思いファームスティに参加しました。体験する前から「自分の好きな仕事」「自分のやりたい仕事」に就こうと思っていましたが、毎日暑い中、汗だくで一生懸命に働く姿を三日間見ていて、「やりがいのある仕事をすると言うことは、こんなにも人を輝かせるものなのだ」と感じました。なので、改めて私は自分のやりたい仕事に就きたい。そしてやりがいを感じながら働きたい！自分の仕事に誇りを持ち、きらきら輝きたい」と思いました

（中学校教師をめざしている）。

次に、インターンシップの目的に照らして、生徒の反応はどうであったか、彼らの作業日誌や報告書から見てみよう。

ア．「高い職業意識を身につける」――

実際の就業体験によって、労働することの大変さばかりでなく、自分がやってみたい仕事なら厳しさがあっても楽しさを味わうことができる。保育士や看護師のように、人との接し方に人間関係の大切さや、人と協同して仕事に従事することの大切さも認識している。また、自分はこの仕事に適しているのかどうかを確認できる場にもなっている。

イ．「学習意欲を高める」――

将来の職業に必要な資格をとるために、短大・四大に入学するための日常の学習活動をしっかりとやらねばならないことを自覚する。さらに、従来の「テストだから勉強する」という受け身から「将来

のために勉強をしよう」と進路を意識した学習へと、学習態度に変化も生まれている。

ウ．「社会性を身につける」――

参加した生徒ほぼ全員が、職場ではしっかりと挨拶し、はきはきと相手の目をみながら話すことの大切さを実感すると同時に、これらのことを今後の学校生活に生かしたいとしている。

また、生徒のアンケート調査結果から回答者全員が「機会があったらまた参加する」、「インターンシップは必要である」と答えており、インターンシップの必要性を強く感じた。

## 三、まとめにかえて

これまで明らかにしてきたように、自分の適性や労働の持つ意味を理解し、進路の目的意識の形成を図る上で、総合学科における教科「産業社会と人間」の役割は大きい。さらに、これに繋いで教育的に組織したインターンシップは、実際の職場で働く体験を通して「何を学ぶのか、何を学びたいのか」が明確となり、その実現に向けて自らを高める力（自己啓発）や職業選択能力を身につけさせてくれたのではないだろうか。

このような力は、「進学校」の生徒に今日最も必要とされている。

新規高校学卒の就職者は三カ年で岩船・村上管内でも五割も離職し、一部に職業や労働に対する未熟さが指摘されている。また、少子化に伴って、一部の大学を除き大学等の進学が容易となり、入学の志望動機が曖昧となる傾向にあるといわれる。

今の高校生に、将来のしっかりとした進路選択の判断をどう生きるのかと関わってどのように導くか、また、その進路実現には日常の学習活動を支える強い動機づけが必要とされる。

高校卒業後、即就職を希望する生徒であれ、大学等進学を希望する生徒であれ、自らが考え、本当に就きたい職業を理解し自覚したときに、生徒は、持っている力を集中してその実現に向けての学習活動に取り組む。そして、卒業後の職場でも学園でも学ぶ力をさらに発揮することになるのではないか。

（うちやま　ゆうへい・県立村上桜ヶ丘高校教諭）